

## 十四. 物資の運搬や人々の往来のためには船や道が使われていた

猪名川は池田、能勢と西国、京を結ぶ重要な河川であることは先に触れましたが、慶長年間の頃から土砂の堆積等により、川床が高くなり、大船が航行できなくなりました。しかし、小船の通船を許してくれるよう何度も許可願いを出しています。船での物資の輸送は大量の物資を荷傷みせずに運ぶことができるという利点がありました。伊丹、池田、能勢の酒、米、炭等は庄本浜、戸ノ内浜や神崎を通り、大坂等へ運ばれました。その証の一つが旧猪名川棕橋詰に佇む常夜燈（写真）ではないかと考えています。しかし、猪名川の通船は沿岸各村の農業用水の確保に難渋をきたすとか、陸路を通る馬借の生活権を脅かす等の理由により度々中断されました。

常夜燈の南、棕橋を通り、西に通ずる道は京街道といえます。堤を通る道や各村々との連絡する道が整備されていったことは別添の岸岡治一郎先生が作成された大正八年の「庄内村全図」を見ても明らかです。



旧猪名川棕橋詰 常夜燈